

小さな谷内六郎展

塚田 實

普段の散歩は近くの駒沢オリンピック公園に出かけることが多い。ここは一九一三年に東京ゴルフ倶楽部として開設され、その後様々な変遷を経て、一九六四年の東京オリンピックでは第二会場として使われた。広くて手入れの行き届いた快適な公園である。

公園に出かける途中、家から近い駒沢小学校に創立百二十周年の垂れ幕があり、「翼を広げ 未来へはばたけ 駒沢の子」の標語も並んでいた。隣に「谷内六郎展」のポスターがあり、十月中旬の十日間、平日は学校が一段落する十五時四十五分から十七時までランチルームで開催されているという。今年が谷内六郎の生誕百周年であることは知っていたが、「なぜ駒沢小学校で展覧会？」の疑問は残った。NHK日曜美術館「遠い日の風景く谷内六郎の世界く」の録画は、まだ観ていなかった。開場時間には早かったため、公園散歩を終えてから立ち寄ることにした。

公園を歩いた後、小学校に戻った。コロナ対策用に入口で名前と連絡先を登録して、中に入った。入口にある「ごあいさつ」を読んで、展覧会開催の経緯が分かった。駒沢小学校のOBが横須賀美術館の谷内六郎館を訪れプロフィールを読むと、駒沢尋常高等小学校卒業とあったそうだ。これは是非駒沢小学校で展覧会をしようとOBの方が奔走し、六郎の奥様達子^{みちこ}、横須賀美術館、世田谷美術館、駒沢小学校PTAの協力を得て、開催の運びとなったそうだ。

谷内は、幼少の頃から喘息を患い、高等小学校卒業後は町工場に就職したものの、喘息により転職を繰り返した。しかし独力で絵を学び、やがて『週刊新潮』の創刊号の表紙を担当し、その後二十五年間約千三百枚描いた。絵には谷内が自ら書いた約四百字の「表紙の言葉」が添えられていて、これがとても味わい深い。

展覧会の絵は、モチーフの四季毎に分けて展示されていた。原画の彩りは鮮やかで、郷愁を誘う夢のある絵に、しばし魅了された。思いがけない谷内六郎展との嬉しい出会いだった。